様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １０ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１２５５

研究課題名（和文）危機対応マネジメント育成に関わる社会科カリキュラムと授業評価スタンダード開発研究

研究課題名（英文）Social studies curriculum related to the development of the crisis response management training of children and development research of social studies lesson evaluation standard.

研究代表者
關　浩和（SEKI, Hirokazu）

兵庫教育大学・学校教育研究科（研究院）・教授

研究者番号：００４３２５８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，子どもの危機対応マネジメント育成に関わる社会科授業の原理と構造を解明し，社会科カリキュラムの基盤となる授業モデルを提案している。また，アクション・リサーチの手法を取り入れ，教師側からのトップダウンの授業構成ではなく，子どもの興味・関心を基にしてボトムアップ的にトピックを次々と展開させていくことで学習問題に迫っていく仮説推論的な学習方法論の有効性を論じた上で，教師の専門職としてのスキルを①授業計画力②授業展開力③子ども理解力④授業省察力を位置づけ，社会科授業評価スタンダードを開発している。

研究成果の概要（英文）：This study is to elucidate the principles and structure of the social studies classes involved in the crisis response management training of children, I have proposed a class model that becomes the foundation of the social studies curriculum.In addition, it incorporates a method of action research.Rather than the class structure of the top-down from the teacher side, discusses the effectiveness of abductive inference learning methodology that go approaching the learning problem by continuously expand the bottom-up to the topic based on the child's interests there.In addition, as a skill as a professional teacher, positioned①The ability to plan the lesson ②The ability to deploy the lesson ③The ability to understand the child ④The ability to refect on lessons , has developed a social studies lesson evaluation standard.

研究分野：社会認識教育学

キーワード：教育学　教科教育学　社会科教育　歴史学習　危機管理　マネジメント　授業評価スタンダード　仮説推論的な学習

１．研究開始当初の背景

(1)現代は，新しい知識・情報・技術が，政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤としての知識が重要性を増している。また，グローバル化，情報化による国際競争の激化，また急激な少子高齢化などにより，学校教育の重要性はますます高まっている。2008 年３月の新学習指導要領の告示では，教育課程の基本的枠組みや教育内容に関する改善事項，各教科の内容についての方向が示され，確かな学力をキーワードとした学力重視の方向への転換が示されている。改訂で重視されたのは, PISA 型読解力の育成であり，社会科においては，社会そのものをテキストと捉え，自らの目標を達成し，自らの知識と可能性を発達させ，効果的に社会参加するために，書かれたテキストを理解し，利用し，熟考する能力であり，情報の「受信・受容」「思考・判断・創造」「発信・提示」という三つの要素の総体である。特に，自分の考えを文章で書いたり，表現したり，情報や資料を分析・解釈し，既有の知識や経験と結びつけて，批判的に検討したり，自分なりの意見を論述したり，説明したりするという論理的な思考力に関わる能力として言語力が注目されている。これまで，情報読解力を育成するための社会科授業の理論的原理的な考察と，具体的実際的に解明することを行ってきた[(1)]。

(2)子どもに情報読解力を育成するための授業の原理と構造を解明し，情報読解力を育成するための社会科授業を数多く例示し，研究成果を公表することができた。ただ，社会科授業を実践しても，学校現場での評価には未だに明確な基準がない。考え方もばらばらである。社会科授業を①科学的，学術的かどうかで評価する。②教師の問いに対する子どもの認識形成のレベルで評価する。③教師の問いの構成で評価する。④子どもの主体的な活動内容を評価する。④教師の問いの構造で評価するなど，明確な評価スタンダードが確立されていない。そこで，社会科授業の何を評価すればいいのかについて，その内容を明確にして，社会科教員として必要な資質能力を確実に身に付けるための仕組みの構築を進めていくことが急務であると考える。そのことは，学校現場の教員にとっても授業を説明するための指標として要望も高い[(2)]。

(3)学校教育現場からのアンケートや，既に取り組まれている事例などを参考にして，「社会科授業評価スタンダード」として開発することで，「知識基盤社会」や複雑化する教育課題に対応できるように，生涯を通して学び続ける姿勢・態度（「学び続ける教師」）を育成し，それらを深（進）化できるものだと考えている。これまでの社会科授業の評価研究は，社会科授業観の検討課題が焦点化され，社会科の理念に関わる可能性を大学教員が模索している[(3)]。一方，学校現場では，主にカルテ方式で，授業評価カードによって三段階程度で評価し，感想を述べ合う程度の授業評価に留まっている状況である。学校現場では，学級経営や指導技術に重点が置かれ，社会科固有の読解力を育成するための授業評価に成り得ていない状況がある。そこで，その指標となる評価基準について，思考ルーブリックの手法を活用する[(4)]。授業力向上のために，事前・本番・事後のそれぞれの場面で，①授業計画力②授業展開力③子ども理解力④授業省察力という四つの力における評価指標の策定を行いたい。また，ピア・ラーニング的発想で，大学と現場が協働で授業評価スタンダードの開発を行うことで，学校現場に寄与できる意義ある研究としたい。

(4)社会科授業では，小・中学校の校種で大きな違いが見られる。単元の知識構造を明確にして，順序よく効率的に子どもに知識内容を教授するのが中等段階での授業であるとすれば，子どもの思考や発想で大きく左右され，教師の授業対応力に関わる力が必要となるのが初等段階での授業である。授業は，「不断の再設計過程である」言われている。特に，初等社会科レベルでは，子どもの既有の知識や経験，思考，発想等を適宜，引き出して展開をしていく授業展開力にあたる部分が重要である。魅力ある単元・教材が構想できただけでは授業はできない。系統性のあるカリキュラムに基づいて，子どもの発言や行動に瞬時に対応できる力，子どものニーズや能力，個性などを理解しながら，社会科に情熱をもって授業が展開できる力などをバランスよく評価ができる授業評価スタンダードの開発を行いたい。

２．研究の目的

本研究の目的は，危機対応マネジメント育成に関わる社会科カリキュラムと授業評価スタンダードの開発を目的とするものである。我が国における先進的な情報読解力育成に関わる授業実践事例を収集し，分析した研究[(5)]を踏まえて，社会科固有の読解力の育成を図るためには，カリキュラムレベルで何が必要なのか。さらに，授業実践の何を評価すればいいのかを解明し，授業評価スタンダードとして策定したい。そのことは，教育マネジメントサイクルを視野に入れて，学校現場の教員の授業力向上だけでなく，読解力育成のための社会科教育体系の再構築と今後の社会科教育研究を発展させるためのさらなる基盤形成につながるものである。

３．研究の方法

本研究は，危機対応マネジメント育成に関わる社会科カリキュラムと授業評価スタンダードの開発を目指して，次の手順で研究を進めた。

(1)我が国における社会科カリキュラム及び授業実践事例を収集する。

(2)危機対応マネジメント育成と言った視点で取り組んでいる学校を協力校として選

定し，各学校での取組を概査する。その際，分析は，学校現場と協働で取り組む。
(3)危機対応マネジメント育成の取組の概査結果を踏まえて，継続的に調査する学校を抽出する。
(4)収集したカリキュラム及び実践事例は,授業実践データベースを開発して蓄積し，実践事例の授業関連リソースの整理・編集を行い，分析対象の事例を選択する。
(5)収集した実践事例について，Ｒ－ＰＤＣＡサイクルの観点から，授業評価のフレームワークを構築して，それぞれの構成要素を策定する。
(6)開発した授業モデルを学校現場で実践し，評価を行うことで実証的な研究にする。
(7)社会科授業評価スタンダード開発を行う。
(8)研究経過及び研究成果は，適宜Ｗｅｂサイトで公表する。研究成果の一部は，学会で積極的に発表を行い，批判を仰ぎ改良を加える。

４．研究成果

(1)本研究は，社会科において，実際にどのような授業を組織すれば，危機対応マネジメントを育成することができるのかを理論的原理的に考察するとともに，具体的実際的に解明することが目的である。子どもに危機対応マネジメント育成に関わる社会科授業の原理と構造を解明し，社会科授業モデルとして例示している。また，アクション・リサーチの手法を取り入れて，実践者の行動を観察して，その結果に基づいて内省し，社会科授業評価スタンダード開発を行っている。
(2)今回の研究によって，社会科授業評価スタンダードを開発することができた意義は大きい。今後とも，他学年や他の単元を研究対象として，継続的に取り組み，社会科授業評価スタンダードの加筆・修正に取り組みたい。これからの社会は，国際化がますます進展していく中で，日本が発展し，これまで以上に重要な役割を担うためにも，様々な分野で国際社会に貢献し，世界の人々から信頼され，尊敬される人間を育成していくことが重要である。公共を意識し，変革したりする意欲や態度を育成するための一つの起点になるのが，帰属する社会に対する子ども一人一人の「思い」である。この「思い」から日本の今日の課題を知り，よりよい郷土や国に発展させるために参画していこうとする意欲が社会科には必要である。
(3)今，注目されているのがアクティブ・ラーニングである。アクティブ・ラーニングとは，ある問題に関する基礎的な知識・技能の習得で終わって満足するのではなく，実生活や実社会の中で適用しながら解釈や価値判断過程を位置づける。つまり，自らの課題の発見と解決に向けて，主体的・協働的な学び方を経ることで，汎用性のある知識や技能を定着させ，さらに，新しいものを生み出していこうというのがアクティブ・ラーニングのコンセプトである。本研究では，危機対応マネジメント育成とは一見遠くに感じられる歴史学習を対象として授業開発の基盤を述べている。歴史学習の究極的な目的を述べれば，歴史を学ぶのは，人類が生存していくための手がかりを得るためである。そして，「歴史を学ぶと未来が見えてくる」ことにならなければ意味がない。時系列的に知識を蓄積していくだけでなく，現代社会に適用可能な知識やノウハウを獲得できることが必要である。そのために，「歴史に学ぶ」姿勢が必要である。歴史を学ぶ子どもは，歴史の中に生きている。歴史を学ぶことで多面的な見方ができることが必要である。巨視的あるいは微視的という見方の違いや視点の転換など，歴史を学ぶことで，凝り固まらない柔軟な考え方ができることが必要である。また，歴史に学ぶことで，自然災害や様々な障害，困難など，人類存亡の危機を克服し，新しい未来を創造することができるんだという前向きな意識が生まれなければ意味がない。歴史は，同じパターンの繰り返しである。この同じパターンだという認識は，複数の因果関係を体系的に学んで初めてわかることである。この学びが，アクティブ・ラーニングそのものである。
(4)本研究で取り上げた第６学年社会科における鎌倉時代の主な学習内容は，①鎌倉幕府の政治機構②封建制度(武芸・御恩と奉公)③執権政治(北条氏の政治)④産業の発達(二毛作・定期市)⑤武家文化(鎌倉新仏教)⑥元寇と徳政令・幕府の滅亡である。この鎌倉時代の学習内容は，「災害」を視点にした内容は存在しないし，教科書にもそのような記述はない。しかし，「災害」をキーワードに，現代につながる見方・考え方を学ぶことが可能になる。つまり，「鎌倉時代を学ぶ」だけでなく，「鎌倉時代に学ぶ」がなければ，今につながる見方・考え方を小学生が学ぶことにはつながらない。「災害」の視点を鎌倉時代の授業に組み込むためには，あえて「歴史をなぜ学ぶのか」という問いが必要である。
(5)社会科における「災害」の扱いは，地震や津波，風水害，土砂災害，雪害などの自然災害を防止するための事業や実際に起こった後の国や地方公共団体の救援活動や災害復旧の工事の取組を学ぶ内容になっている。まず，「災害」をどのように子どもにエンカウンターさせていくのか。その全体像を構想しておく必要がある。「災害」の学習は，健康・安全な社会生活を支える社会のしくみ，つまり，子どもが災害から守られる側の受け身の教育だけでなく，自分で自分を守るための教育にしなければならない。2011 年の東日本大震災では，「想定外」という言葉が連発されたが，「想定外」と言われること自体，「歴史に学んでいない」証拠である。鎌倉時代は，武家社会が確立した「軍事政権」の時代である。「サムライ」や「武士道」など，今に続く日本人の精神的支柱が出来上がる時代である。また，武家とは，暴力によって物事を

解決しようとする人々である。彼らが世の中を支配しようとした時代は，殺伐とした時代で，家の名を存続するため，兄弟が敵味方に分かれ殺し合う。こうした時代は，常に緊張感が求められ，人々の精神状態も不安定な時代であったと予想される。さらに，公式の日誌である『吾妻鏡』の記録には，「鎌倉大地震」という記述が，約 140 年ほどの鎌倉時代の間に，55 回を数えている。さらに，国立天文台編『理科年表』では，鎌倉時代に起きたマグニチュード＝７以上の巨大地震は，1241 年，1257 年，1293 年の３回ではないかと推測されている。中でも 1293 年の地震は，直下型で，死者推定 23,000 人位という鎌倉時代最大のものであった。これらの鎌倉大地震では，津波で由比ヶ浜八幡宮の拝殿が壊れたり，鎌倉の神社仏閣全壊，家屋転倒。建長寺炎上，寿福寺本殿転倒，大慈寺埋没などの記録がある。大地震が続き，さらに大きな不安が世の中に拡がったと思われる。しかも，二度の元寇。見知らぬ外敵に対応が迫られる時代である。こうした状況から人々の不安定な心を救うべく，多くの宗教家が「末法」という言葉を使い，様々な活動をする。この時代がいかに不安定であったのか。裏を返せば，現代と同じような悩みを有する人々が，鎌倉時代に多く生まれたのではないか。鎌倉時代の人も現代人と同じように「いかに生きるべきなのか。どうしてこのような運命を受けるのか」というような悩みを抱えていたのではないか。さらに，悩みが生まれる社会に変化したのではないかと考えることができる。鎌倉時代以前の人々は，親の仕事を継ぎ，他の地域の人とはあまり接触せずに生きている。ところが，鎌倉時代になると，鎌倉をはじめとして日本各地に都市ができ始め，定期市や交易などで他の地域の人々と出会うことになる。他の地域の人と出会うと他の地域の人は，言葉も通じない場合もあり，同じ人間であるのに，同じ人間には思えず，混乱してしまう。これらに対応したのが鎌倉新仏教である。だから，６年生では扱われない鎌倉新仏教について取り上げていく必要がある。

(6)現代社会は，有毒物質に囲まれて生活をしている。鎌倉時代の津波でも同じような被害が出たことが予想される。しかし，建物の崩壊一つとっても現代との大きな違いがある。それは，鎌倉時代には，再利用・再資源化が可能な原材料でつくられていたということである。燃やして，再利用できるものは再利用する。でも，現代では，放置していたり，燃やしたりすると有毒物質が発生したり，処分するにも詳細な分別処理が必要である。このことが物語るのは，このままのライフスタイルを続けていいのか。産業構造や社会構造の根本的な見直しまで踏み込んで考える必要がある。鎌倉時代の教材に「災害」の視点を組み込むのは，あらゆる機会を活用するということでもある。歴史に学び，自分の身は自分で守ることを，あらゆる機会に徹底的に教えていくことが必要である。社会科では，子どもが獲得する知識は，子どもの主体的関与から独立して客観的に獲得されるのではなく，エンカウンター的手法によって，知識を再構成して，さらに，クラス内での交流によって，肯定的な自己受容感の形成とともに知識共有化を図るのが授業の醍醐味である。新しいことを学ぶことや既に知っている内容の理解を深めることは，直線的なプロセスではない。我々が，物事を理解しようとすると，これまでの経験と新たな探究から得たばかりの知識の両方を利用する。そもそも，科学的問題に抱く興味は，何か不思議な事象に刺激されてかき立てられる。この事象について，その謎が解けるまで，あれこれ考え，調べ，問い合わせ，探索を続ける。新しい観念の検討を始めると，調査中の事象の理解に適すると思われる以前の探索結果の断片をつなぎあわせていくことで，少しずつ知識が形成されてくる。時に知識の断片に食い違いが生じた場合は，古い考え方を打破して再構築する必要がある。この創造的な営みを通して，概念的理解を拡大していき，問題を解決しながら理論を検証するのが社会科授業である。また，社会科授業は，子どもが，個人では解決できないような問題を社会の問題として捉え，問題となっている社会の構造やしくみを客観的に分析し，問題点を明確にしながら，自分の既有のフレームワークを批判的に省察して，付加・調整を繰り返すプロセスが重要である。

(7)社会は，すべてのものが関係性で成り立っている。子どもには，物事を複数の要素が相互に関連し合っている関係の束であるという見方を鍛えなくてはならない。点在している事実や事象をつなげることによって，一つでは何の意味のないことでも，二つ以上になると意味をもつものになってくる。これが，社会がわかることである。社会科授業は，子どもが，既有の知識や経験を再構成することで，知識をボトムアップ的に構築できるような授業デザインが必要である。そのことは，転移や応用可能な知識獲得につなげるだけでなく，自分の生活にも適用可能な社会を見るためのフィルターを獲得していくことにつながる。社会がわかるには明確な手順が必要である。その手順に沿って板書で具現化することで，クラス全員で知識共有ができる。この知識共有は，子ども一人一人が，それぞれがもっている知識を一人だけの知識とするのではなく，全員で共有することによって，クラス全体の水準を上げることができる。それが，授業そのものの有効性である。そのためには，教師の日々の地道な教材研究が欠かせない。また，社会科授業で重要なことは，エビデンス evidence（証拠・根拠）を明らかにすることである。何を基に考えたのか。何を根拠に判断したのか。エビデンスを明らかにしなければ，ただの日常的・常識的理解に過ぎない。「答え」が日常的・常識的にわか

るような「問い」ではいけない。一つのことがわかったら，それ以上にわからない「問い」が出てくる。子どもの中で，どんどんトピックがつながっていく。これが社会科の醍醐味である。そのために，社会科授業を創ることの楽しさや鑑識眼を含めた子ども対応の楽しさをベースにした授業開発研究が求められている。

(8)本研究では，まず，日本における先進的な社会科授業の取り組みや授業実践，カリキュラム，テキストなどを収集し，分析することで，危機対応マネジメント育成に関わる授業の役割と機能を究明している。次に，危機対応マネジメント育成に関わる社会科授業の新しい形態を社会科教育の体系に組み込むための授業構造を解明し，その具体的な社会科カリキュラムを提示している。その際，危機対応マネジメント育成を視点にして，学習者の認識内容の質的変容と主体的関与を保障するために，学習者の理論形成のための方法として，情報を一つのトピックとして捉え，関連づけていく Web の手法を援用したウェッビング法を援用している。この危機対応マネジメント育成と社会科授業を結びつけた授業を究明し開発できたことで，今後の社会科教育研究を発展させる基盤を形成することになる。

(9)社会科とは，そもそも子どもが中心になって，子どもが生きている社会を研究するための教科である。現代の複雑な社会情勢や子どもの実態に応じた授業へと改革していくためには，本研究では，その学習理論を社会的構成主義に求め，仮説推論的な学習方法の提案をしている。この仮説推論的な学習方法に基づく授業は，教師が，学習者に授業内容を教授したり，その獲得方法を指導したりするこれまでの授業と本質的に相違するものである。この授業では，教師の立場は，学習者に対する促進者であり，協力者となる。授業内容となる知識は，学習者の主体的関与から独立して客観的に存在するものではなく，学習者が社会的交流を通して，主観的に創り出していくものとなる。各学習者の学習スタイルを重視し，社会的交流を図り，知識を構築していくものである。つまり，授業内容となる知識は，学習者の主体的関与から独立して客観的に存在するものではなく，学習者が，授業という枠組みの中で主観的に創り出していくものとなる。学習者が，社会的・文化的交流を図りながら，知識を構築していくことが基本である。社会科授業は，学習者自身が，協働的学習の中で，社会的交流を図り，教師や仲間の援助や協力によって，教材を構築していくことで，授業を創造していく形態になってくる。ウェッビング法は，授業という枠を越えて，社会で生きていくための知的な武器と成り得る。問題を発見し，その解策やその後の見通し，新しいつながりを構築していくことが目的だからである。全体と部分の構造や関係を明らかにしていくことで，問題の本質に迫っていく。ウェッビング法による概念操作によるキーワードの発見と融合による新しい関係の構築によって，自己認識形成を目指していくことが目的とされるべきである。

＜註＞

(1)基盤研究（C）一般課題番号 19530809「情報読解力を育成する社会科授業の開発研究」（平成 19 年度～21 年度）において，情報読解力を育成するための社会科授業のあり方について研究成果をあげてきた。

(2)兵庫県内 210 校の連携協力校でのアンケート調査によって，授業評価に関する動向を探った。次の文献を参照されたい。「教育実践研究（アクション・リサーチ）の理論と実践」兵庫教育大学大学院学校教育研究科・教育実践高度化専攻小学校教員養成特別コース，教育実践コラボレーションセンター共同研究プロジェクト(平成 20～22 年度)報告書，2011 年 3 月，210 頁。

(3)社会科授業観を評価する代表的な研究として次の研究を取り上げた。棚橋健治『社会科の授業診断－よい授業に潜む危うさ研究－』明治図書，2007 年，159 頁。

(4)思考ルーブリックとは，子どもたちに身につけさせたい「考える力」を具体的に書いた評価基準のことである。次の文献に詳しい。高浦勝義『絶対評価とルーブリックの理論と実際』黎明書房，2004 年。

(5)前掲書(1)。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）〔雑誌論文〕（計１０件）

①關浩和「社会事象の関係を図解する板書構成力のつけ方」『社会科教育』No.646 号，明治図書，査読無，2013 年 4 月，52 頁～53 頁。

②關浩和「年間計画を魅力的にするポイントはここ危機対応マネジメントの視点を」『社会科教育』No.657 号，明治図書，査読無，2014 年 1 月，7 頁。

③關浩和「今後の教職大学院におけるカリキュラムイメージに関する調査研究」，平成 25 年度文部科学省先導的大学改革推進委託事業成果報告書－「理論と実践の往還を支える共通５領域のカリキュラムイメージ」，査読無，2014 年 3 月，17 頁～29 頁。

④關浩和・原田智仁・吉水裕也・米田豊他３名「社会科固有の『読解力』形成のための授業構成と実践分析（Ⅴ）－第３学年単元『お店のひみつにせまる！』の場合－」兵庫教育大学学校教育研究センター紀要『学校教育学研究』第 26 巻，査読有，2014 年 3 月，47 頁～56 頁。

⑤關浩和・原田智仁・吉水裕也・米田豊他３名「社会科固有の『読解力』形成のための授業構成と実践分析（Ⅵ）－第４学年単元『天空の城（竹田城）のあるまち・朝来市』

の場合－」兵庫教育大学学校教育研究センター紀要『学校教育学研究』第 27 巻，査読有，2015 年 2 月，1 頁～9 頁。
⑥關浩和「新しいものを生み出す社会科の教材に－アクティブ・ラーニングでホドムアップを－」『学校教育』No.1176，学校教育研究会，査読無，2015 年 8 月，6 頁～13 頁。
⑦關浩和「社会科授業研究においてキーコンピテンシーをどうとらえるか」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』，第２７号，査読有，2015 年 12 月，101 頁～104 頁。
⑧關浩和・原田智仁・吉水裕也・米田豊他３名「社会科固有の『読解力』形成のための授業構成と実践分析（Ⅶ）－第３学年単元『酒米の王様山田錦のひみつ』の場合－」兵庫教育大学学校教育研究センター紀要『学校教育学研究』第 28 巻，査読有，2015 年 12 月，11 頁～20 頁。
⑨關浩和「『学びにひらく』子どもを育てる社会科授業」『教育のあゆみ』No.42 号，兵庫教育大学附属小学校教育研究会，査読無，2015 年 12 月，4 頁～9 頁。
⑩關浩和「新指導要領社会科の『重点』－課題の突破点はここだ基礎的・基本的な知識，概念や技能の習得」『社会科教育』No.681 号，明治図書，査読無，2016 年 1 月，8 頁～9 頁。

〔学会発表〕（計６件）
①關浩和・吉水裕也・原田智仁・浅野光俊他２名「社会科固有の『読解力』形成のための授業開発研究Ⅰ－第３学年単元『お店のひみつにせまる！』－」社会系教科教育学会第 25 回研究発表大会，2014 年 2 月 8 日，大阪教育大学（大阪府）
②關浩和「危機対応マネジメント育成に関わる社会科授業開発－第６学年単元『鎌倉の武士』の場合－」全国社会科教育学会第 63 回全国研究大会，2014 年 11 月 1 日，愛媛大学（愛媛県）
③關浩和・吉水裕也・原田智仁・重枝孝明他２名「社会科固有の『読解力』形成のための授業開発研究（Ⅱ）－第４学年単元『天空の城（竹田城）のあるまち・朝来市』の場合－」社会系教科教育学会第 26 回研究発表大会 2015 年 2 月 22 日，兵庫教育大学（兵庫県）
④關浩和・長谷川侑「アクション・リサーチによる小学校社会科授業の開発研究（Ⅲ）－多面的な価値観形成を視点にした第４学年単元『特色ある地域と人々のくらし』の場合－」社会系教科教育学会第 26 回研究発表大会，2015 年 2 月 22 日，兵庫教育大学（兵庫県）
⑤關浩和・吉水裕也・原田智仁・森清成他２名「社会科固有の『読解力』形成のための授業開発研究Ⅲ－第３学年単元『酒米の王様山田錦のひみつ』の場合－」第 27 回社会系教科教育学会・第 32 回鳴門社会科教育学会合同研究大会，2016 年 2 月 20 日，鳴門教育大学（徳島県）
⑥關浩和「危機対応マネジメント育成に関わる社会科授業評価スタンダード開発研究」第 27 回社会系教科教育学会・第 32 回鳴門社会科教育学会合同研究大会，2016 年 2 月 20 日，鳴門教育大学（徳島県）

〔図書〕（計５件）
①永田忠道・池野範男編『地域からの社会科の探究』「第３章第３節　歴史と伝統ある京都社研「極覧」の神髄とは」日本文教出版，2014 年 12 月，83 頁～85 頁。
②梅津正美・原田智仁編『教育実践学としての社会科授業研究の探求』「第３章第３節授業場面からアプローチする小学校社会科授業改善」風間書房，2015 年 3 月，212 頁～235 頁。
③全国社会科教育学会編『新社会科授業づくりハンドブック』「第４章第５節　スマートボード，電子教科書を活用した授業づくり」明治図書，2015 年 10 月，173 頁～182 頁。
④關浩和『教育実践研究のためのカリキュラム・マネジメント』兵庫教育大学教職大学院教育実践高度化専攻，2013 年 4 月，170 頁。
⑤關浩和『生活科授業デザイン論』ふくろう出版，2015 年 4 月，242 頁。

〔その他〕
ホームページ等
http://hiroseki.sakura.ne.jp/kaken.html

６．研究組織
(1)研究代表者
關　浩和（SEKI,Hirokazu）
兵庫教育大学大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：００４３２５８４
(2)研究協力者
宇和　誠（UWA,Makoto）
末永　琢也（SUENAGA,Takuya）
平川　泰海（HIRAKAWA Yasuumi）
広原　康平（HIROHARA Kouhei）
長谷川　侑（HASEGAWA Yuu）
佐藤　太紀（SATO Taiki）
平林　幸　（HIRABAYASHI Miyuki）
中村　優之（NAKAMURA Masayuki）